

日本はアジアの光だった
ヘンリー・ストークス 講演
平成25年11月6日
大東亜会議70周年・憲政記念館

皆様、こんばんは。ヘンリー・ストークスです。本日は皆様の前で、お話しのお話を頂戴する機会を頂き光栄です。このシンポジウムは一九四三年に開催された大東亜会議七〇周年を記念して開催されております。このような歴史的な瞬間を皆様と共にできることをたいへん光栄に存じます。

二〇世紀で最も驚く展開は、五百年続いた植民地支配、その呪いが終焉を迎えたことにあります。白人による支配が霧散してしまいました。誰もがまったく予想しなかったことです。

一九三〇年代末に「インドの独立はいつになるか」と問われ、ネルーは「七〇年代には実現するかもしれない」と答えました。つまりそれは、彼の亡き後にはという意味です。一九四〇年代初頭には、インド人たちから独立の気運が高まりました。なぜ独立の気運が高まったのでしょうか。

答えは簡単です。第二次大戦が勃発し、五百年のドラマの中での新興勢力が、白人植民地支配に痛烈な打撃を与えたからです。その新興勢力が、日本でした。インド独立のタイムテーブルは、ネルーの七〇年代から第二次世界大戦の終焉時へと短縮されたのです。ここで、二〇世紀から一七世紀初めまで時間をもどしてみましょう。

インドでは、イギリスが一六〇〇年に東インド会社を設立し、植民地支配に着手しました。イギリスは、マドラス（一六三七年）、ボンベイ（一六六一年）カルカッタ（一六九〇年）に東インド会社を進出させました。イギリスの侵略は、プラッシーの戦い（一七六四年）マイソール戦争（一七九九年）シーク戦争（一八四五年）と続き、一八五七年から五九年にかけて反イギリス民族闘争である有名なセポイの反乱が起きました。

こうしてイギリスがインドを抑圧する中で、一八六八年、日本で明治維新が起きました。ほぼ同じころに、インドでは独立のために戦った歴史的な人物が生まれています。一八六七年にはマハトマ・ガンジーが生まれ、一八九七年には、チャンドラ・ボースが誕生しています。

一八七七年、イギリスが直接インド全土を統治するインド帝国が成立しビクトリア女王が「インド皇帝」として即位しました。つまり、ボースはイギリスのインド植民地支配の絶頂期に誕生したのです。ボースは今でもインドで「ネタージ」と呼ばれています。ネタージとは「偉大な指導者」という意味です。日本の支援を得て、ボースはINAを結成しました。Indian National Army インド国民軍です。非暴力主義でイギリスの植民地支配と戦ったガンジーと対照的に、ボースは司令官として戦闘を戦いました。

一九四三年五月一六日、ボースは来日し、嶋田海軍大臣、永野軍令部総長、重光外務大臣などと面会し、その上で、東條英機首相と会談しました。

ボースは日比谷公会堂で講演しました。そのメッセージは当時のアジアの人々の気持ちを代弁していました。

「約四〇年前、小学校に通い始めた頃に、アジア人の国が世界の巨人・白人帝国のロシアと戦いました。このアジアの国はロシアを大敗させました。そしてその国が、日本だった

のです。このニュースがインド全土に伝わると興奮の波がインド全土を覆いました。インドのいたるところで、旅順攻撃や、奉天大会戦、日本海海戦の勇壮な話によって、沸き立っていました。インドの子供たちは、東郷元帥や乃木大将を素直に慕いました。親たちが競って、元帥や大将の写真と手に入れようとしましたが、できませんでした。

その代わりに市場から日本製の品物を買ってきて、家に飾りました。

ボースは「日本はアジアの希望の光でした。」とハッキリ語りました。

ボースはこう続けます。「このたび日本はインドの仇敵のイギリスに宣戦しました。日本はインド人に、独立のための千載一遇の機会を下さいました。われわれは自覚し、心から日本に感謝しています。ひと度この機会を逃せば、今後百年以上にわたりこのような機会は訪れることはないでしょう。勝利はわれわれのものであり、インドが念願の独立を果たすと確信しています。」

重要なのは、主張より行動でした。ビクトリア女王が「インド帝国」皇帝に即位して66年目にあたる一九四三年十月、自由インド仮政府が樹立されました。シンガポールでの大会で、ボースは満場の拍手をもって、仮政府首班に推挙されました。

ボースは「チャロ・デリー」つまり「デリーへ！」と、進撃を宣言し人々はそのメッセージを掲げ、行進しました。祖国インドへ向けた歴史的な進撃の開始でした。インド国民軍INAの将兵は日本軍とともに、インド・ビルマ国境を越え、インパールを目指し「チャロ・デリー！」と雄叫びをあげ、進撃しました。「われらの国旗を、レッド・フォートに掲げよ」ボースは将兵を激励しました。

自由インド仮政府は、日本とともに、イギリスアメリカに対して宣戦布告をしました。同年(一九四三年)十一月五日より六日間にわたって東京で大東亜会議が開催されました。これは人類の長い歴史において、有色人種によって行われた最初のサミットとなりました。

東條首相、満州国の張景恵國務総理、中国南京政権の汪兆銘行政院長、フィリピンのラウレル大統領、ビルマのバー・モウ首相、タイのピブン首相代理であるワイワイタヤコン殿下の首脳が一堂に会し、ボースはインド仮政府の代表を務めました。

今日、日本の多くの学者が大東亜会議は日本軍部が「占領地の傀儡」を集めて国内向け宣伝のために行ったと唱えています。しかし、そのようなことを言う日本人こそ、日本の魂を売る外国の傀儡というべきです。

会議では大東亜共同宣言が満場一致で採択されました。ボースは「この宣言がアジア諸国民のみならず、全世界の被抑圧民族のための憲章となることを願う」と訴えました。ボースは、日本は「全世界の有色民族の希望の光だ」と宣言しました。

この500年の世界史は、白人の欧米キリスト教諸国が、有色民族の国を植民地支配した壮大なドラマでした。

そのなかであって、日本は前例のない国でした。第一次世界大戦の後のパリ講和会議で、日本は人種差別撤廃を提案したのです。会議では各国首脳が、国際連盟の創設を含めた大戦後の国際体制づくりについて協議しました。人種差別撤廃提案が提出されると、白豪主義のオーストラリアのヒューズ首相は、署名を拒否して帰国すると言って退室しました。議長であるアメリカのウィルソン大統領は、本件は平静に取り扱うべき問題と言って日本に提案の撤回を求めました。日本で外務大臣も務めた日本代表団の牧野伸顕男爵は、ウィルソン議長に従わず採決を求めたのです。イギリス、アメリカ、ポーランド、ブラジル、ルーマニアなどが反対したが、出席16カ国中11カ国の小国が賛成し、圧倒的多数で可決されました。しかしウィルソン大統領は「全会一致でない」として、この採決を無

効としました。牧野は多数決採択を求めたが、議長のウィルソン大統領は「本件のごとき重大な案件は従来から全会一致、少なくとも反対者なきによって議事を進める」としました。人種差別撤廃提案が十一対五の圧倒的多数で可決したにもかかわらず、ウィルソン大統領はこの議決を葬ったのです。今日の文明世界ではありえないことです。いまアメリカの大統領は黒人ですが、そのようなことは当時は全く考えられないことでした。日本人も白人ではなく有色民族です。同じ有色民族として誇りある日本人は看過することができなかったのです。

インドネシアの植民地支配は、一五九六年にオランダが艦隊をインドネシアに派遣したことに始まります。

オランダの三五〇年以上に及ぶ植民地支配に終止符が打たれたのは、一九四二年の日本軍の進攻によるものでした。インドネシアには白馬に跨る英雄が率いる神兵がやってきてインドネシアの独立を援けてくれるという伝説がありました。日本軍の進攻は、伝説の神兵の到来を思わせました。日本兵は、神話の軍隊であったのです。

ジョージ・カナヘレは「日本軍政とインドネシア独立」という著書で、次ぎの四点を掲げています。

- 一. オランダ語、英語の使用を禁止。これにより公用語としてインドネシア語が普及した。
- 二. インドネシア青年に軍事訓練を施した。これにより青年が厳しい規律や忍耐、勇猛心を植え付けられた。
- 三. オランダ人を一掃し、インドネシア人に高い地位を与え能力と責任感を身につけさせた。
- 四. ジャワにプートラ（民族結集組織）やホーコーカイ（奉公会）の本部を置き、全国に支部を作り、組織運営の方法を教えた。

日本は第二次大戦でアジアの国々を侵略したとされますが、どうして侵略する国が、侵略された国の青年に軍事訓練を施すのでしょうか。彼らの精神力を鍛え、高い地位を与え、民族が結集する組織を全国につくり、近代組織の経営方法を教えることがありますか？

この事実は、侵略したのが日本でなかったことを証明しています。日本はアジアの国々を独立させるあらゆる努力を惜しまなかった。では一体、どこからの独立でしょうか？もちろん、アジアの国々を侵略していた白人諸国の支配からの独立です。

ジャカルタの中心にムルデカ広場があります。ムルデカはインドネシア語で「独立」を意味します。独立の英雄ハッタとスカルノの像とともに高さ三七メートルの独立記念塔が立っています。地下1階には、独立宣言の実物が納められています。ハッタとスカルノが直筆でサインをしています。そこに独立の日が「一七—八—‘〇五」とハッキリ書かれています。

一七—八は八月十五日の独立の日を示していますが、‘〇五、〇五年とはどういう意味でしょうか。インドネシア人はイスラム教徒ですからイスラム暦ではありません。ましてキリスト暦でもありません。では〇五年とは何暦でしょう。実は‘〇五年は、日本の「皇紀」なのです。

一九四五年は日本の「皇紀」では二六〇五年にあたるのです。初代の天皇である神武天皇が即位して建国をした時から数えた年です。ハッタとスカルノは日本に感謝して皇紀を採用したのです。インドネシア独立の生みの親は日本だったのです。だから二人はインドネシアの独立宣言の独立の日を、日本の「天皇の暦」によって祝福したのです。

皆さん、こうした西欧の五百年に及ぶ植民地支配は世界中で広く認知されたことでありま

す。我々は今日、植民地支配の禍の終焉をこうしてここに集い祝福しています。
日本は「日の昇る国」です。真に自由なアジアを求めるみなさんで手を取り合ってゆきま
しょう。民主的なアジアの連帯を実現する重要な役割を日本が果たすことを願っています。
日がまた昇ることを願って、本日は締め括らせて頂きます。ご清聴ありがとうございます。
た。